

会員の広場

ソビエトの A.M. Oboukhov 氏について

森 広 道*

天気1991年1月号 (Vol. 38, No. 1) の“会員の広場”欄で、井上栄一氏が「ソビエトの A.M. Oboukhov さんのこと」と題して、オブホフ氏の思い出を書いておられた。早速自宅に帰り“気象と水文(露語)”を開いてみると、1990年5月号にアレクサンドル・ミハイロビッチ・オブホフ (1918—1989) 氏の死亡記事が掲載されていた。すでに内島善兵衛教授等よりお聞きになられてるかもしれませんが、その内容をこの欄で紹介したいと思います。

なお、私個人としてはソ連の農業生産と気象との関係から、アレクサンドル・ミハイロビッチ・オブホフ氏が干ばつとほぼ同時に発生する乾熱風(スホーベイ)に関心をもたれていたことに変大興味をおぼえました。

1989年12月3日、非凡な人物で世界的に著名な学者アレクサンドル・ミハイロビッチ・オブホフ・アカデミー会員が亡くなった。我々は十分な根拠をもって、彼は独立した物理分野としての大気物理学の創始者であった、ということができる。

アレクサンドル・ミハイロビッチの先駆的な研究である気象場の統計的記述、乱流理論、大気中における音・電磁波の伝ばんに関する研究と気象力学、流体力学タイプのシステム理論に関する研究は、常に当時の科学レベルに著しく先んじていた(時には10年も!)

彼は多数の研究により、大気研究を独自の方向へ発展させた。その結果、大気現象をうまく説明することのできなかった40年代から60年代にあって、彼のいくつかの研究のなかにはすでにその本質が述べられている。

55年間の研究活動のあいだに、アレクサンドル・ミハイロビッチは新たな地球物理学研究に対しても、止むことのないイニシアチブをもって複雑な理論問題研究に取り組んだ。また、30数年前には大気物理研究所の研究生に対して必然的実験理論の原則を教育した。

アレクサンドル・ミハイロビッチの研究スタイルは、高い数学的才能、深い物理的な感覚と大気中にある変わりやすい様々な謎に対する揺ぎない関心からくるところ



の諸特性に特徴があった。

また、すでに学生のときからアレクサンドル・ミハイロビッチの関心は、大気浸透に関する構造数学にあった。1934年、中等学校卒業直前であった16歳のとき、大学へは入学できなかったが、2年後の1936年には「1934年5月の干ばつ時の大気混濁度について」という最初の科学論文を発表した。以後、大気混濁度についての関心は彼の全生涯にわたって継続されることとなった。

アレクサンドル・ミハイロビッチは、偉大な科学的才能だけでなく、人々をより以上に神霊化する固有の美(クラサター)に苦しんだ。このことは、いかなる国・地方のいかなる科学者代表会議の席においても見受けられた。そのため、彼は友人グループのなかにおいて詩を読むことを好み、簡潔で極限に飽和した考えの論文を読

* 大阪管区気象台技術部予報課

むことを好んだ。よって、彼の主要な科学的発見は、その発見を実用面で応用するという考えに結び付いていた。

鋭く迅速であった彼の頭脳は、科学に関した全ての分野において極めて重要であったし、同時に、より高い国民的自覚と尽きない笑いは、彼の周囲に変わらぬ温かい雰囲気をかもし出した。

アレクサンドル・ミハイロビッチは、体調が悪く幻想

に悩んでいたにもかかわらず、旧友であったアンドレイ・ドミトリエビッチ・サハロフ・アカデミー会員に最後の別れを告げるために出かけていった。そして今、アレクサンドル・ミハイロビッチに別れを告げるために多くの人がやってきた。

アレクサンドル・ミハイロビッチ喪失の痛みは、我々の記憶のなかに残るであろう。我々は彼の考えを発展させ、その上にさらに伝統を積み上げねばならない。



「オゾン研究連絡会」発足す。

昨年11月29日の気象学会理事会において、「オゾン研究連絡会」が承認されました。趣旨や体制については、下記に示した通りです。

オゾンに関心ある方々の参加によって、幅広いオープンな研究会にしていくつもりです。今後の御協力をよろしくお願いします。

(文責 小川, 川平, 牧野, 林田)

記

気象学会・オゾン研究連絡会発足申請書

日本気象学会理事会 殿 1990年11月3日

「オゾン研究連絡会」設立に関する申し込み書

1. 設立の趣旨

オゾンホールや温室効果など大気オゾン等の大気微量成分に関わる問題は、学界レベルだけでなく社会的に注目と関心が注がれています。

しかしながら、これらの科学的解明のためには数多くの課題があり、急速な研究の発展が要求されています。

このような現状の下で、日本におけるオゾンに関する基礎研究の発展のためには、気象学会こそが日本の学界における中心的役割を果たすことが求められていると考えます。

この役割を果たす体制をより充実するために、オゾン研究の到達段階および問題点を常日頃から明らかにする研究者間の交流を行う場が、必要であると判断しています。この場がオゾンの化学的研究、力学的研究および様々な複合的研究の活発な交流の会合となることによって、オゾン研究者が増大し、日本における大気微量成分

の研究水準が益々高度になっていくことをめざしたいと考えています。

このような趣旨にもとづき、「オゾン研究連絡会」を設けて頂くことを申し込むものです。

2. 活動の内容

以下の活動を行っていく。

- (1) 気象学会毎に研究会を行う。
- (2) 他学会との微量成分研究の交流を行う。
- (3) 会員名簿を拡大および整理する。
- (4) 研究会=ニュースを発行する。
- (5) その他

3. 世話人体制

代表世話人 関口理郎：日本気象協会

世話人 小川利紘：東京大学理学部地球物理学研究施設

岩坂泰信：名古屋大学太陽地球環境研究所

木田秀次：気象研究所

川平浩二：富山工業高等専門学校

牧野行雄：気象研究所

松原広司：気象庁

林田佐智子：国立環境研究所

事務局担当世話人

小川利紘

川平浩二

牧野行雄

林田佐智子